

《研究ノート》

「地域」の概念と地域主義

——比較研究、イタリアの場合——

竹内啓一

「地域」という日本語は、現在、社会、人文諸科学における学術用語として、そして、教育や行政を通じてかなりの程度まで日常化した言葉として、西洋の *Region* に由来する言葉に相当するものとして用いられている。かなりの程度まで日常化しているといっても、「地域」という日本語は、やはり威儀を正した言葉であって、どのようなものが「地域」なのか問われたとき、すべての日本人が共通した理解を示すわけではない。

西洋の諸言語に *region, région, regione* などとこれに該当する言葉があるのであるが、*village* とか、*champ, field* とかの、他の地理的ランカージュと同様に、この言葉が、具体的に何を意味するかということは、国によって、また地方によってさえ違っているし、またこの言葉がどの程度まで日常語化してい

るかということも、言語によって違っている。だからこそ、一九三〇年代にアメリカの地理学者達が、地理学の対象乃至観点として——対象であるのか、観点であるのかにより大分事情は違うのではあるが——*region* なる言葉の意味を明確にしようとしたとき、彼らが大いに努力したのは、この言葉から、おなじ英語を用いても、国により、地方により、あるいは文化により、さまざまなかたちで与えられている日常的、具体的な意味、日本語で言えば「くに」「郡」「地方」「地域」等々の内容をこの言葉から切り離して、*region* を權威ある学術語にしようとすることであつた。*homogeneous (uniform) region, nodal (functional) region* などが、その実はあまり意味のない区分も、*region* という言葉から、まず日常の手垢を洗い落とし、それを純粹の操作概念にすることによって、はじめて可能なのであつた。ホイトルシーは、さらにすすんで、*region* という言葉を、全側面において把握され、ひとつの独自性をもった空間単位に対してのみ用いることを主張し、全体性をかたちづくることのない、実質的なものではなく操作的に把握される空間単位には *conpage* という日常離れた学術用語をあてることを提案したが、このことは、学者の絶望的な試みにもかかわらず、*region* という英語が、人々の感知しうる、具体的な閉曲線で囲まれた地表の単位という意味を持ち続けたことを物語るものであろう。

このようなかたちでの *region* という概念の神秘化とならんで、他方、英語圏諸国の二十世紀前半における知的営為の中に

は、region なる言葉に新しい意味内容、工業化社会における社会、経済の実質的な空間単位としての、そして地方自治の単位としての意味内容を与えようとする試み、そのようなものとして region を理解した上で展開された思想運動も存在した。

同じアメリカについて言えば、一九二三年、ニューヨークの何人かの建築家、都市プランナーによって Regional Planning Association of America が設立されたが、この regional という言葉が用いられたのは、行政的細分の枠をこえて生活圏が拡大しているということ、そのような生活圏を単位にしたプランニングがなされるべきであること、そして、そのようなプランニングは、生活圏としての region の間の不公平の解消をめざすべきであるということの三つの主張を含蓄するものであった。

このような意味での region の理解は、一九三〇年代に入ると Southern regionalism あるいは「ニューディールと結びついた regional development」という考え方の中に継承されていったのである。⁽²⁾

われわれ日本人にとっては、すでに十分すぎるくらい抽象的かつ権威主義的な言葉である「地域」という言葉が、西洋のどの言葉がもつ意味、ランガージュとしてそれがもつ思想を決して完全に伝えるものでないことは、以上の、region という言葉のアメリカにおける用いられ方の一端を見るだけでも明らかであろう。それでも、この「地域」という日本語が、アカデミズムにおけるジャルゴンであるだけならば、それなしにすませることもできようから問題にする必要もない。しかしながら

region, regional という英語に相当する言葉が各国でますますさかんに用いられるようになり、これは、社会、人文諸科学が社会の空間的側面を今まで軽視してきたことと、他方では、社会の空間組織、あるいは空間的相互作用の文化的、社会的、経済的意味がますます大きくなったことによるのであるが、それにつれて、翻訳語として、また日常化した日本語としての「地域」という日本語も、ますますさかんに用いられるようになってきているので、翻訳語としての側面に限ってだけでも、もうすこし、この言葉について吟味をしておく必要がある。

「地域」というあまり馴染のない中国の古典にもある言葉が、近代日本においてどのようにして、軍事用語、行政用語、そしてさらには學術用語になったかということの詮索はここではしない。しかし、もとの西洋の言葉の意味が、場所により、時代によって非常に異なっているのだとすれば、「地域」という言葉を用いるのには、いささか慎重ならざるをえないであろう。

さきに見た英語の region とちがって、たとえばフランス語の region は、近年、ドゴール体制の下で用いられるようになった経済計画地域の場合をのぞいて、行政単位としての意味をもったことはかつてなかったが、どのようなものが region であるかということは、明瞭に理解されていた。すなわち、十四世紀末以降、ノルマンディー、シャンパーニュなどの pays の意味で用いられていたし、十八世紀以降「共通の文化的特徴をもつ人々がたがい接して居住する範囲」を、もう一つ広い意味での pays と理解し、そこから nation という概念が形成され

た後においても、*région*の意味は、アンシャン・レジームの下における *province* か、さらにそれを細分した *pays* に限られていて、それより大きいスケールにも小さいスケールにも及ぶことはなかった⁽⁴⁾。このような背景があったからこそ、ガロワは、「この狭義の *pays* すなわち *région* が、自然的、歴史的領域と一致することを今世紀初頭に明示したのであった」⁽⁵⁾ のことからだけでも、フランス地理学派の特色を、「地域研究」*études régionales* にあると言うだけで、「地域」という言葉の理解を、日本語的夢幻自在、抽象化、神秘化したままにとどめておくのでは、不完全または誤った理解であることは明らかである。このような *région* なるものが、若干の広狭の幅はあっても、はっきりとした実体をもった言葉として意識されていた以上、フランスにおいては、アメリカにおけるような操作概念化の試みは存在しなかった。操作概念としての空間的単位が必要になったとき、フランス地理学は、*organisation spatiale* なる言葉を新たに用いたのである。同様にして、注目しなればならぬのは、バリ・ロシュエンの後、*régionalisme* なる言葉がはじめて用いられるようになったとき、それは、「日本語の「地域主義」という言葉のもとに理解されるものよりも、はるかに具体的、実践的な性格をもつものだったという点に注意せよ。

(1) Whittlesey, D. S. 'The Regional Concept and the Regional Method'. James, P. E. and Jones, C. F. eds. *American Geography, Inventory and Prospect*. Syracuse

U. P. 1954 pp. 21—68 この間の議論が詳しく紹介されている。

(2) Friedmann, J. and Weaver, C. *Territory and Function, the Evolution of Regional Planning* Arnold 1979 pp. 29—31.

(3) ここでは詳しく論じていることはできぬが、その理論の発展の社会的背景を考えれば、一九三〇年代の regional development という考え方を決して無関係でなく第二次大戦後の regional science は、地理学と同様、region という概念の神秘化にむこう貢獻した。

(4) Juillard, E. 'Historique de la notion de région dans la géographie française. Claval, P. et Juillard, E. *Région et régionalisation dans la géographie française et dans d'autres sciences sociales* Dalloz 1967 pp. 9—11
George, P. *Dictionnaire de la géographie* P. U. F. 1970 pp. 360—362.

(5) Gallois, L. *Régions naturelles et noms de pays, étude sur la région parisienne*. Armand Colin 1908 pp. 35—54.

(6) 現代のフランスの文献に espace と région とはほぼ同義と区別して用いられることが多く、Actions Thématiques Programmées, *Espaces et régions en Europe Occidentale* C. N. R. S. 1976 114 p. など、この région という言葉をフランスを地図に記したとき、この

Isnard, H. *L'espace géographique* P. U. F. 1978 219 p.
がある。

二

地中海世界における「地域」問題について何らかの考察を加えようとすれば、そこでこの「地域」がどういう意味をもっているかということをも、まず吟味しておく必要があることは、もはや明らかであろう。さきに、フランスにおける regionalisme の例をあげたが、フランスにおいて、それは、ジャコバン的の中央集権主義に対するものとして、古き良き信仰と地方文化への回帰を指向するものとして、社会的には古いカトリック勢力、政治的には右翼と結びつくのが常であったが、同時に、 regionalisme が nationalisme のかたちをとることは、バスクおよびブルターニュにおける一部の運動をのぞいてなかった。このことが、フランスの市民革命、そして、そこから生まれたフランスという民族国家の性格によるものであることは、たとえば、スペインにおいてはカタルーニヤの運動にしても、バスクの運動にしても、ガリシアの運動にしても、それぞれが十九世紀前半の頃から nationalismo を名のり、 regionalismo を名のることがまれであったこと、そして、現代スペインにおいては、 nationalismo と regionalismo とが同一視されている、すくなくとも実体においてこの二つが区別できなくなっていることとくらべてみれば明らかである。現在、カタルーニヤ、カステイラ・ラ・ヌエバなどは、行政上は一応 region と呼ばれてい

るが、これは、はっきりとした antiguos estados であり、他方では、region という言葉を、いわば操作概念として用い、機能的「地域」区分を行なう試みもなされている。しかし、その場合の region の尺度は、国家をマクロ・レベルの単位とすればメソ・レベルの空間単位であって、日本語で地域区分と言う場合のようにミクロ・レベルの空間単位までを意味することは、ないが、region と pais との結びつきは、カステイラ語では、フランス語におけるほど強くない。換言すれば、カステイラ集権主義は、スペインにおける市民革命の欠如または不徹底の故に、pais を nación のレベルにまで拡張することに成功しなかったし、したがって、二分化された pais 概念の間の緊張、region と estado との対立をうみださなかったのである。

おなじ地中海世界でありながら、そしてスペインと同様にして、市民革命の不徹底、あるいはジャコバンの推進力の欠如が言われているイタリアであるが、ここでは regione という言葉の持つ意味はスペインとは異なっている。古代アウグスツスの時に設定されたイタリア半島の十一の regio は、すぐ用いられなくなり、帝制末以来、regio の名前は用いられないまま、行政組織の再編がくりかえされたから、語源的には、たしかに regione につながっても、近代において形成された regione 概念と古代ローマの regio とは結びつかない。周知のように、イタリアのリソルジメント運動は、イタリア文化復興の理念と共和主義思想との奇妙な混合をその思想的母胎としていたが、フランス革命が結果的にもたらしたジャコバンの中央集権主義と

ちがって、当初から連邦主義、地方分権主義が、そこにはあった。結果的には、ビエモンテ王家による中央集権体制が勝利をおさめ、何人かの連邦主義者は結局統一イタリアに受け入れられることがなかったのであるが、これらの連邦主義者およびサヴォイ王家集権主義者が、イタリア半島にあった諸国家(stato)の諸領域を、どのような概念によって把握していたかということ、は、イタリアにおける「地域」概念検討の出発点として重要である。

ミラノの共和主義者、そして、連邦主義者であり、結局、イタリア王国成立後もスイスにとどまったカッタネオの、代表的地理学的著作「ロンバルディアの自然のおよび人文的知識」をはじめとする彼の著作を検討してみると、中部イタリアおよび北イタリアに関しては、歴史的に形成された領域的単位としてのロンバルディア、ヴェネト、ビエモンテ、トスカナなどを、はっきりと regione と呼んでいて、その範囲は、現在、共和国憲法の下で大幅な自治が認められている regione のそれと大体一致する。しかし、南イタリアに関しては、サルデーニヤ、シチリアという島嶼を別にすれば、両シチリア王国時代の南部半島部においては、北部・中部におけるような明瞭なかたちで regione という概念は確立していなかったし、現在の行政単位としての regione の境界とは、十九世紀前半の両シチリア王国の行政区割はかなり違っていた。ここでは、regione という概念はあっても、それは、山系、河谷を単位とする自然的なまとまりと考えられていたのである。一八五二年の、コレンティ

によるイタリアで最初の regione への区分は、基本的に自然地域によるものであり、すくなくとも南部に関しては、住民の地域帰属意識にもとづいたものではない。

北部・中部において、regione が、すぐれた歴史的・経済的な領域単位として、すでに十九世紀前半において認識されていたのに対して、南イタリアにおいては、regione という言葉が、普通名詞的乃至は自然地域的な意味において理解されていたという相違は、なによりも、北部および中部における空間組織の南部のそれとの形成の歴史的差異に由来するものである。この事情は、一八五九年から一八六一年にかけてのビエモンテ政府内部における新しいイタリアの行政制度に関する議論のなかにおいても同様であって、autonomie regionali という言葉が用いられている、南部において、regione とは、旧領国 ex-stato と、ほぼ同義に理解されていて、南部半島部は、ほぼ一括して取り扱われていた。

北部と中部におけるのと同じ意味での regione という概念を、イタリア南部にも確立しようという試みは、当初、一八五九年以降の北部分権論者によって展開された。そして、新しい王国を十五から十九くらいの区域 compartimenti に分けるという試みは、ロンバルディアの反ビエモンテ主義的分権論者によってのみでなく統一後のシチリアの自治主義者によっても注目された。ここでは、「libertà regionale のために」あるいは「分権のための sistema regionale」などという表現が用いられていたが、ここで、regione とは、つまり、シチリ

アあるいはロンバルディアというような、文化的、歴史的単位が理解されていたのであるし、南部半島部も、いくつかの regione からなることが主張されていたのである。しかし、民衆のいわばメンタルマップに、このような地域概念が、この時点で定着するということはなかった。

南部半島部において、regionalismo の基礎をなすものとしての regione ひろくが認識され、その自治が主張されるようになるのは、一八八七年のデブレティスによる十二の regione の提案と、それをうけてフォルツナートなどの南部主義者達⁽²¹⁾が、活潑に regionalismo を主張するようになってからのことである。しかし、そのような南部主義者の地域主義⁽²²⁾あるいは後キリスト教民主党に継承されたスタートツォ神父の地域主義⁽²³⁾も、以上みたように、十九世紀を通じて、具体的な領域、具体的な内容をもったものとして形成された「地域」概念を基礎にしていたのである。

現代のイタリアの学界において、このような regione の概念から離れて、いわば操作概念としての「地域」を議論する試みがないわけではない。しかし、そのようなものの代表であるヴァレガ⁽²⁴⁾についても、イタリアについて論じている場合には、やはり regione, regionalizzazione などという言葉を、メソ・スケールの空間単位に用いてのみ用い、 regione と同じ言葉で、英語の region の翻訳として、マクロ・レベルからミクロ・レベルまで無制限に重層化して用いられることをなす。イタリア語の regione と同じ言葉が、日本語の「地域」には、

完全には対応しないのである。

- (7) Philipponeau, M. 'La gauche et le régionalisme (1945—1974)'. Gras, C et Livet, G eds. *Régions et régionalisme en France du XVIII^e siècle à nos jours* P.U.F. 1977 pp. 529—544. フレミング左翼が regionalisme の主張を支持するようになるのは、地方レベルでは一九五〇年代末のプラターニョ社会党にはじまり、中央レベルではようやく一九六〇年代末になってからのことである。

- (8) Gispert, C. y Prats, M. J. *España: un estado plurinacional* Editorial Blume 1978 p. 67—69.
- (9) Terrero, J. *Geografía de España*. Raman Sopena. 1956 p. 318.

- (10) Mignel de Azola. *La regionalización de España*. Revista de Occidente 1972 pp. 45—50.

- (11) 何故「地中海世界」という表現にこだわるかという点については、以前に考察したので、ここでは再論しない。竹内啓一「地中海という言葉についての一考察」一橋論叢第七十六巻 一九七六年 六一六—六一二頁。

- (12) 行政単位としての現代イタリアの regione は、多くは日本語文献で「州」と訳されている。

- (13) たとえば Cattaneo, C. *Notizie naturali e civili su la Lombardia* 1844. *Scritti storici* Felice le Monnier 1957 pp. 326—327. を参照。

(41) Almagià, R. *L'Italia UTET* 1959 Vol. II. pp. 924—925.

(42) Almagià, R. Regione. *Enciclopedia Italiana*, XXXVIII, Treccani, 1935 p. 1000.

Almagià, R. Regioni naturali e nomi territoriali. *Rivista geografica Italiana* XVI 1909 pp. 226-233.

(43) Correnti, C. Fisionomia delle regioni italiane. *Nipote del Vesta Verde* 1852 pp. 42—61.

(44) Giannini, M. S. Le regioni: rettificazioni e prospettive Nord e Sud XLII—XLIII—10 1963 pp. 49—59.

(45) Gambi, L. *L'equiuoco tra compartimenti statistici e regioni costituzionali* Fratelli Lega (Faenza) 1963 p. 17 参考 Ruffilli, R. *La questione regionale dall'unificazione alla dittatura (1862—1942)* Giuffrè, 1971 pp. 22—25. 参考

(46) Perez, F. *La centralizzazione e la libertà* Palermo 1862 p. 86. Ruffilli, R. op. cit. 1971 p. 16. 参考

(47) Anonimo *Il sistema regionale richiesto dalla natura e dalla garanzia del diritto umano* Palermo 1863. Fratini, F. *Il pensiero politico di Vito D'Ondes Reggio* Brescia 1964 p. 145. 参考

(48) Fortunato, G. の regione に関する主張は、一八九六年の議会における演説に最も良く表現されている。(49)

Mezzogiorno e lo stato italiano, Laterza 1911 Vol. I. pp. 447—468. 参考

(50) Sturzo, L. La regione. Relazione letta a Venezia al III Congresso nazionale del Partito Popolare Italiano, il 23 ottobre 1921 Villani, R. (a cura di) *Il Sud nella Storia d'Italia* Laterza 1961 pp. 504—518.

竹内啓一「スエーデンの神父における南部主義——南伊のフロウインチマリスキ——」地理 第十六卷七号 一九七一年 三八—四三頁。

(51) Vallega, A. *Regione e territorio* Mursia 1976 184 p.

III

リンネジメントの中であられた regione の認識とその自治の主張、そして、共和国憲法に遂に regione の大幅な自治がもたらされるようになる経緯、さらに、共和国憲法制定後二十年以上たつて、キリスト教民主党の左施国を契機にして、はじめてその regione に自治が認められるようになった過程を、あつかうてみる。イタリアにおける regionalismo は、フランスにおける regionalisme とはかたがた、ほとんどの場合に、左翼の立場からの主張であった。同時に、このイタリアの regionalismo が、nazionalismo と同一視されたことは、いく少数のシチリア分離主義者の場合を別にすれば、決してなかった。フランスやスペインにおけるような王朝国家の領域的枠組の遺産のないところに民族国家が成立したイタリアの regionalismo

について、これは注目すべきことである。このことは、民族国家としてのイタリアの性格を考える場合にも、そして、イタリアにおける「地域」問題、イタリアにおける「地域」開発政策を検討するさいにも、欠落させることのできない一つの観点を提示するものであろう。そして、これらのことすべてを検討することなしには、「地域」という日本語や、「地域主義」という考え方を、安易に外国の事例に適用することはできないのである。

* 本稿は昭和五十五年度、文部省科学研究費総合研究A「地理思想の伝播と継承に関する比較研究」(課題番号五三八〇二二) 研究代表者 竹内啓一) による研究成果の一部である。

(一橋大学教授)